

二〇二一年一〇月二〇日

田島渡船

竹ヶ島たけがしまは北灘湾の湾口から南東方向に約四キロメートル沖の宇和海に浮かぶ。面積は〇・五一平方キロメートル、周囲が三・六キロメートルの小さな島で、高島（無人島）という島と砂洲で繋がっている。

竹ヶ島へは定期航路がない。したがって竹ヶ島に渡るには、渡船をチャーターしなければならない。幸い、竹ヶ島やその沖にある御王神島みかみかみ（かつては人が住んでいたが今は無人島）は磯釣りに訪れる釣り人が多いことから、北灘湾に面する各地に渡船業者も多く、ネットで確認した限りでも一〇業者に及んだ。このうち二業者は釣り客を専用としていて、私のような島を訪ねる一人客は受け入れていないとして断られた。三件目に電話した田島渡船が連れて行ってくれることになった。ただし、釣客の送迎の関係からか出発時間を一五時にして欲しいという。また料金は二万円とのことだった。

宇和島の市街地に近い九島くしまを訪ねてからレンタカーで国道五六号を南下し、宇和島市役所の津島支所の先を右折、北灘湾に沿って西に向かう。宇和島市津島町北灘乙という場所に田島渡船があり、道路脇に大きな看板が出ているのですぐにわかった。初めての土地で、道に迷って約束の時間に遅れると大変なことになるため、少し余裕をもって来たので三〇分以上前に到着した。乗り場が確認できたので、少し周辺を視察する。

付近で待機していると、しばらくして船長が戻ってきた。ガンガゼを籠一杯持っている。ガンガゼはイシダイ釣りのいい餌なので、釣り客に販売するのだろう。



田島渡船の瀬渡し船（左の船に乗船）

予定よりも早く一四時四八分に船着場を出発した。湾内には魚類養殖の生簀が所狭しと並ぶ。生簀には自動給餌機が装備されていた。おそらくマダイが飼われているのだろう。また、湾の南側には真珠養殖の延縄施設が並ぶ。

湾内は養殖施設が多いことから瀬渡し船はスローで走った。湾の外に出るとスピードを増したが、同時に北西からの風が強まった。昨日、愛媛県の比岐島ひじまに行った時にチャーター船の船長が明日は冬型の気圧配置になり風が強くなると言われたが予想通りになった。波しぶきが強風で飛ばされ、右舷には近寄れない。竹ヶ島に近づくと高島が風避けとなって北西風は遮られ、静かになった。

一五時一〇分ごろ、竹ヶ島に到着した。所要時間は二〇分強だった。

島民は一五人

田島渡船の船は島の人に遠慮してか、漁港の外れの護岸に船の舳先を着けた。舳先から飛び降りて竹ヶ島に上陸する。渡船は私が戻るまで、そのまま湾内で待機することになった。

周辺には真珠養殖のボンデン・ブイや真珠ネットが雑然と放置され、雑草に埋まりかけており荒涼とした雰囲気寂しさを感ずる。

目の前には石を三メートルほど積み上げた塀があり、その背後に家が建つ。地形的に北西風は避けられているので、おそらく台風時の風や波浪から守るためだろう。

埋立地の先は漁港になっていて、漁船四隻が浮桟橋に係留されていた。その奥の内港には船外機八隻と真珠養殖用と思われる平底の漁船に係留されている。さらにそこから直角に曲がった山際の護岸沿いにRC二階建の長屋が並ぶ。建物の前にはクレーンが整備されており、近代的な建物は寂れた島には不釣り合いに映る。この建物は真珠養殖が盛んであった時代につくられた真珠の作業小屋で、全部で一六経営体分が連なっている。もちろん水産庁の

補助事業で作られたものだろう。

二〇一五年国勢調査時の竹島の人口は二三人、世帯数は一〇戸であった。後述する島の古老・梅田さん（八四歳）によると、現在島に住んでいるのは七世帯一人とのことで、常時島にいるのは一〇人ほどだ。そのほとんどは高齢者で、一部の人は本土側に住む子供のところに行ったり来たりしているらしい。島で真珠養殖をしている人は本土側に住み、島に通いながら仕事をしているという。

竹ケ島は一七〇〇（元禄一三）年に開拓が始まったと伝えられ、一九一八（大正七）年に島民が庄屋から土地を買い取るまで、宇和島の大庄屋赤松家の所有地であった。

竹ケ島の世帯数は明治中期には二六戸に増えてから、大正年間には二八戸、一九五三年に二五戸、一九七三年に二六戸（全て教員世帯を除く）と安定して推移していた。一九六〇年以降の高度成長期に多くの島で人口流出が起ったが、竹ケ島は例外的にほとんど変化がみられなかった点に特徴がある。

これは一九六三年に後述する真珠及び真珠母貝養殖が島に導入されたためだった。一九九六年の時点でも世帯数は三一戸、人口は九九人を維持していたから、竹ケ島における人口の急激な減少は二一世紀に入ってからのことだったのである。減少した原因は、一九九六年ごろから発生したアコヤガイの大量斃死によって島の経済を支えてきた真珠及び真珠母貝養殖が壊滅的な打撃を受けたことにある。

現在、三〇戸以上あった世帯が七戸に減っているから、島の家の多くは空き家になっている。た



▲放置された真珠養殖用のボンデンパイ

▼強風を避けるためにつくられた高い石垣の家

だ、通勤で真珠養殖を営む人と時々島を訪れる人が多いとみえて、荒れた家は少ない。

イワシ網

ここで竹ヶ島の歴史を振り返っておこう。竹ヶ島は一九五五年まで北宇和郡下灘村だったが五町村が合併して津島町になり、二〇〇五年に宇和島市になった。

『津島町誌』によれば、竹ヶ島に人が住むようになったのは、宇和島藩の大きな収入源であったイワシ網を営むためだった。宇和島藩庁伊達家史料(三)の「式墅截 下」には一六八二(天和二)年に竹ヶ島に新たな漁場ができて結出網(共同漁業組織)一帖が新造され、八戸軒の家が共同で運営するようになったことが記されているという。結出網の経営に関わる経費、つまり漁港、網、魚の干場、網船、手船などの総費用と藩に納める銀約一五貫(入漁料に相当)はすべて庄屋(上述した赤松家)が負担した。したがって結出網で働く人々は雇われだったといえよう。ちなみに年間三〇〇俵(約一八トン)の干鰯が獲れば、黒字になったようだ。

上述したように竹ヶ島への移住は一七〇〇年から始まったとされているので、竹ヶ島にイワシ網の漁場ができた時期の八年ほど後になる。おそらく当初は日振島か本土側の北灘あたりから漁場に通って操業していたか、季節的に小屋掛けして操業していたのだろう。そのうち定住した方が楽ということになり、一七〇〇年から島に住むようになったと考えられる。

竹ヶ島への移住者は日振島と淡路島の二つの説があるようだが、両説とも納得できる。竹ヶ島には「清家」という姓が多い。日振島も清家が多いので、日振島からの移住説は説得力がある。一方、宇和海でイワシを獲る漁法は淡路島の福良地方から伝わったといわれており、漁法を伝えるために淡路島から宇和海にやってきた人がそのまま島に住み着いたケースもあるのかもしれない。

イワシ網漁業のために島に移住した人々は、当然ながら食料の確保を迫られる。当時、武士以外は自給自足が原則だったから山を開墾して段畑(段々畑のことをこの地方の人々は段畑という)を造成、麦などを栽培した。つま



真珠養殖の作業用施設

り半農半漁の営みが始まったのであった。

以来、半農半漁の暮らしが、江戸時代から明治、大正、昭和と続いた。島の段畑は山の上まで続き、全部で約一〇ヘクタールあったという。多い人で七〇アール、少ない人で一〇アールから一五アールを耕作していた。農地が少ない人は漁業をメインにしていたようだ。農業は基本的に女性が担い、冬に女性が岩ノリを採ることもあったが漁業は男の仕事だった。イワシが獲れなくなつてからは一本釣りや刺網を営んだようだ。

真珠養殖の導入

半農半漁の島に大きな変化をもたらしたのが真珠養殖である。

旧津島町で最初に真珠養殖に成功したのは柿の浦の実藤盛男であった。一九五〇年のことである。しかし技術的に未熟であったため、優秀な挿核技術を先進地の三重県から導入する見返りとして下灘の嵐湾（下灘漁協のあるところ）への入植を認めることにする。また県外からの真珠養殖業者の入漁は地元雇用の増大と真珠産業の振興によって漁村を豊かにするという思惑があった。宇和海のイワシ漁業は一九五五年をピークに急激に不漁になっていったし、日本の経済発展によって貨幣経済化が急速に進み現金が欲しい時代に入っていた。一方、三重県の養殖漁場は過密養殖が災いし漁場環境が悪化していたから新たな漁場の確保が求められていた。両者の利害は一致したのである。

津島町では、一九五六年に伊予真珠（北灘湾）と村田真珠（嵐湾）が進出した。宇和海全体では、県外から一八業者が進出している。

こうしたなか、竹ヶ島でも真珠養殖の機運が高まっていく。しかし技術がなかったので三重県から養殖業者を受け入れることにしたが、下灘漁協は当初反対したようだ。島民はよその地区で県外業者を入れているのに竹ヶ島に入れさせないのはおか

しいのではないかと主張し、結局、三重県からの移住者を受け入れて一九六二年に島で真珠養殖が始まった。三重県からの移住者は宮本章さんといい、竹ヶ島における真珠養殖の先駆者となった。彼の息子も島で跡を継いだ。三代目の孫は中学生まで島にいてその後島を離れている。

竹ヶ島では島民一五戸と宮本さんを含む一六戸が株主になり、真珠養殖の共同事業体を組織する。また、挿核（真珠母貝に核を入れること）が不慣れだったため三重県からその道のベテラン三人（女性）が島にやってきて、宮本さん夫婦を合わせた五人が一五戸（経営体）分の核を入れてくれたそうだ。

愛媛県は一九五七年に、県外から進出した真珠業者と地元漁民の生産調整を図るため、「愛媛方式」と呼ばれる真珠養殖事業指導指針を策定する。その内容は、①真珠養殖と母貝養殖の経営分離、②母貝養殖の漁協管理、③区画漁業権免許は漁協と真珠養殖業者の共願方式、であった。

しかし一九六〇年ごろから母貝の価格が低迷すると、母貝生産者の中から真珠養殖への転換を求める声が大きくなる。その結果、一九六二年から母貝養殖業者の真珠養殖への転換が認められることになった。竹ヶ島での真珠養殖は一九六二年以降のことなので、真珠養殖と母貝養殖が混在する時代に入っていた。『津島町誌』によると、一九六五年に竹ヶ島で一経営体が真珠養殖を始めているが、おそらく上述した共同事業体がこれに該当する。その後共同事業体は解散して個人経営になったと思われるが一九八五年の時点では八経営体が真珠養殖を営んでいた。一九八八年漁業センサス時の真珠養殖は一二経営体、母貝養殖は五経営体のあわせて一七経営体であった。

母貝養殖の種苗は島の周りで杉の葉を海中に吊るして自家採苗したこともあったようだが、メインは高知県から購入していたという。六月ごろにアコヤガイの稚貝を高知県まで買いに行き、トラックと船で島に運び、四五センチメートルのパールネットに入れて二年ほどかけて母貝に育てた。貝の表面にフジツボや海藻がついて成長を妨げるので、年に七、八回、貝を圧力海水で掃除した。竹ヶ島のアコヤガイ母貝は、自然環境の良さから病害虫が少なく、高値で取り引きされ、主に三重県へ出荷されていたという。